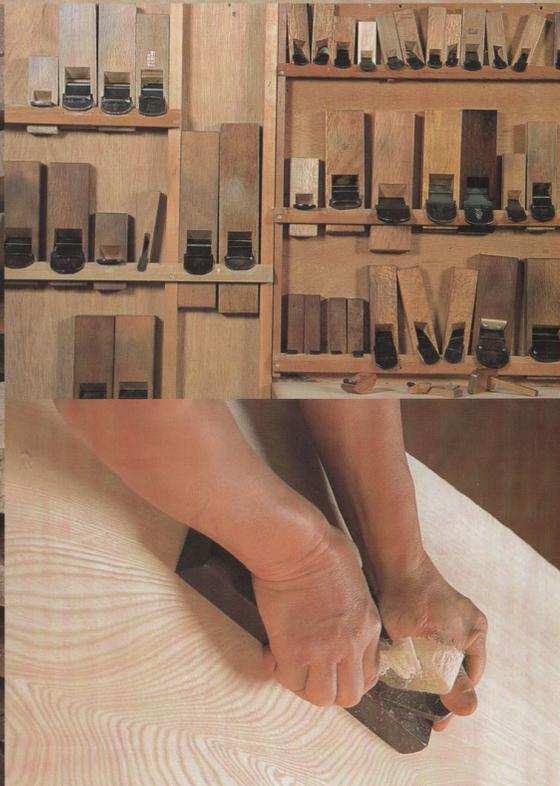


芸大で油絵を学んだ馬場さんだったが、木工との出会いが生き方を変えた。卒業後江戸指物師のもとに弟子入りし伝統工芸を学んだ後、この工房をスタートさせた。



温もりを醸す大きな囲炉裏のテーブル

木工房 人

その凛とした美しさは、優れた彫刻作品そのものである。しかし永い年輪を重ねた木と鍛えられた鉄の融和が、私たちの懐かしい記憶を呼び覚ます。集い、暖をとり、語りあった団らんの時。懐かしい囲炉裏の思い出である。

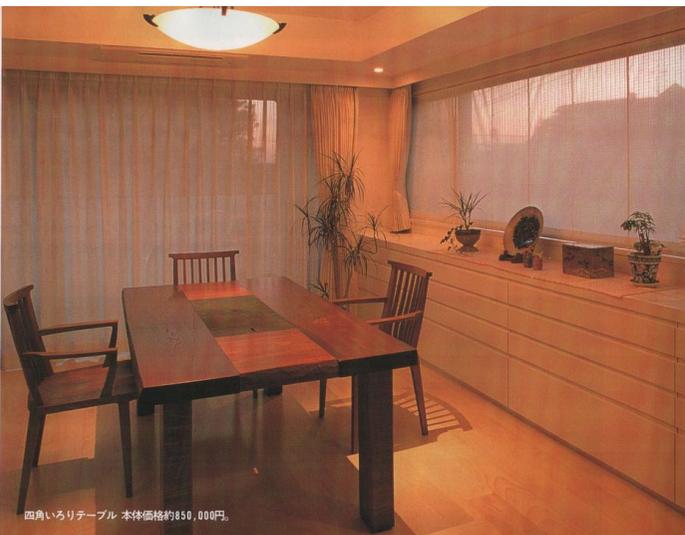
Photos & Text Chiyoshi Sugawara Coordinate Yumiko Inokuchi

三角いり大テーブル 参考価格2,500,000円 木の可能性を十分に引き出したカッティングと、いりりの自在鉤がオブジェとしての要素も引き出している。

竹林を抜ける風が目覚める素材の木たち

その工房は何の変哲もなく、ただ広かった。工房の周囲いっぱいには積み上げられた木材は、木工作家の馬場健二さんが日本全国を歩き回って探し、こつこつ集めた木材たちである。木材は、その木が成長した歳月と同じぐらいの期間使用できる。だからこそ、何代にもわたり使えるものを目指し、何百年もの樹齢を重ねた木材を求めて国中を探し歩く。めぐりあった木材は平行を緻密に保つ、しっかりとした土台の上に高く積み重ねられ、雨風日光の影響を考慮し五年、十年の月日をかけて自然乾燥される。気の遠くなるようなつきあいで。こだわりではない、それが必要なのだ。手作りだけにこだわって自由な発想も進化もない、職人であると同時にアーティストでなければならない。自分は何を作ろうとしているのか？ 試行錯誤が続くなか、偶然閃いたのが三角いり大テーブルだ。家庭料理のお店の設計をしていた時、三角形の広いスペースが余り大テーブルを置くことになった。見知らぬ客同士が相席しても、気まずい雰囲気にならないデザインが必要だ。そこで「いりり」が考えられた。暖かみがあり、人の目をひきつけるもの。そして、オフシーズンも草花などでさりげない演出ができるもの……。

工房の一面に移された素材の板は型どりにれ丁寧な鉤がかけられる。シユツ、シユツ。鉤が木肌を走ることに美しい木目が露わになり、芳香を放ち始める。まるで鉤の一削り一削りに新たな息吹を与えられたかのようだ。工房の背後に繁る、うっそうとした竹林を吹き抜けてきた風が、何年も眠り続けていた木の目覚めを、そっと促しているようにも感じられるのだった。



四角いろりテーブル 本体価格約850,000円。



台形いろりテーブル 本体価格約350,000円。

木との語りから産まれる本物を求めて

「いろり」が私たちの生活から消えて久しい。都会ではなおさらである。かつて囲炉裏は家の中心であり重要な役割を果たしていた。自在鉤が架けられ、いつもチンチンお湯が沸き、灰の下にはおやつやの焼き芋があった。寒い季節には暖房装置でもあり、そこからかすかに立ちのぼる煙は、柱や天井を熏し家を護った。そして何より家族が集まる場所、団らんのある場所であった。

木工家 馬場健二さんが、三角いろり大テ

ーブルに託しているのは、紛れもないこの人を包み込む温もりなのである。

火や木の温もりひかれ、人は自然にそこに集まる。小さな火は、私たちの心を解きほぐしてくれるからだ。テーブルのサイズはスペースもゆったりとしていて居心地も良く、大勢集まっても窮屈感はない。しかも三角いろり大テーブルは、お互いが真向かいに座ることがないため、視線がわずかに交わせ、心地よい間がもたれる。

三角というユニークな形と、いろりに組み込んだ着脱可能な鉄製の自在鉤の存在は、洋

間にも和室にもあう立体的なオブジェとしての美しさを持ち、部屋にアクセントをつけてくれる。いろりに蓋をすれば、さらに広いテーブルとして利用でき、蓋を竹やガラスなどに替えて季節に応じたテーブルのデコレーションを楽しむことも可能である。しかし何と

言っても、この三角いろり大テーブルが私たちを魅了するのは、巧みにバランスがとれた木と鉄の融和が醸し出す存在感だろう。

全体から見れば小さな部分に過ぎない鉄が、時に主役となり、周りの木がこれをやさしく包み込んで鉄の無機感を引き立てる。同時に

鉄の硬くシャープな存在が木のもつ有機感、生命感を支えていると言えるかもしれない。むしろ「木工房」が創作するテーブルは三角だけではなく、長方形や台形のものもある。しかしトチやサクラ、ケヤキ、センなどの樹齢を重ねた一枚板を使用する姿勢は変わらない。木は生き物であり、そこには生きていく木の姿がある。その木の引き出すのが馬場さんの木工姿勢なのだ。

馬場さんは言う。木も人間と同じ十八色で、育て環境も違えば木質も違う。そして乾燥させると、次第にそれぞれの性格が現れてくる。新入社員が性格が徐々に現れてくるのと同じ感覚だ。木の個性の性格を読んで、それをどのように活かしてゆくか、木と語り合いながら作品を作り進めて行くのは面白いと思う。優等生でつまらない木もあれば、グレした木で面白いものもある。グレるとは、乾燥させている間にひどく反ったり、曲がったりする事である。

予めバーンこの制作を進めているとはいえず、木材は十年ほどかけて充分に乾燥した素材の選別をし、いろりの鉄部分の準備には二〜三年を要するため、注文を受けてから制作に大きいもので一年くらいかかるという。しかし、私たちが手取りさや便利さを求め、安価なものを早く手に入れよと使い捨てにした結果、大量の廃棄物を出している。本物、良いものを大切に使うという文化を失ってしまった。私たちの安易な生き方が、大切なものを失っていることに気づくべきなのです。馬場さんはそう付け加える。

自分が欲しいと思えるものを作り続けたいんです。作り手の気持ちは必ず作品に反映されます。自分が欲しいと思えないものをお客さんが喜ぶはずはないのですから。



竹の蓋が涼しげな印象を放つ、夏の表情。



冬、いろりに灯された火を囲み舌鼓をうつ。